

柴田 克彦 (音楽評論家)  
Katsuhiko Shibata

## ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840–1893)

### 歌劇「エフゲニー・オネーギン」Op.24より“ポロネーズ”

ロシア最大の巨匠チャイコフスキーは、バレエ等の管弦楽曲や交響曲、協奏曲で知られているが、オペラにも相当な力を注ぎ、10にのぼる作品を残した。「エフゲニー・オネーギン」は、ヴァイオリン協奏曲と同じ1878年に完成された5作目のオペラ。翌年モスクワで初演され、晩年の「スペードの女王」と並ぶ代表作となった。田舎娘タチヤーナの純愛を退けた貴族オネーギンは、数年後に公爵夫人となった彼女と再会し、改めて恋心を抱くも、時すでに遅し……といった全3幕の物語は、プーシキンの小説に拠っている。

“ポロネーズ” (モデラート) は、第3幕冒頭の公爵家の舞踏会で演奏されるオーケストラ曲。開幕を告げる序奏に続いて、ポーランドの民族舞曲ポロネーズのリズムを用いた壮麗な音楽が展開される。

### ピアノ協奏曲第1番 変口短調 Op.23

チャイコフスキーが完成した最初の協奏曲。1875年という比較的初期の作ながら、彼の3曲のピアノ協奏曲はもとより、古今の協奏曲の中でも最上位の人気を獲得している。

本作は世に出るまでの経緯でも有名だ。チャイコフスキーは、モスクワ音楽院院長で大ピアノニストのニコライ・ルビンシテインに献呈しようとしたが、「無価値で演奏不能」と酷評された。怒った彼は、問題点を指摘する大家に向かって「一音たりとも変更するつもりはない！」と応酬した挙げ句、ドイツの巨匠ハンス・フォン・ビューローに楽譜を送付。初演は1875年10月、ビューローの演奏旅行先であるアメリカのボストンで行われた。しかし間もなくニコライも価値を認め、チャイコフスキーも2度に亘って改訂を施した。従って現在耳にするのは、1889年に改訂された版である。

曲は、古典的な協奏曲形式で書かれながらも、民族的色彩と抒情性、無類の迫力とスケールの大きさを合わせもった力作。ピアノのヴィルトゥオーゾ性も高く、奏者の腕前発揮に相応しい局面が多数用意されている。

**第1楽章:**アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストーソ — アレグロ・コン・スピリット。ホルンの出だしでおなじみの長い序奏部をもつ壮大な楽章。主部は、民謡の変形といわれるリズムカルな第1主題と哀調を帯びた第2主題を中心に、多彩な展開を遂げる。

**第2楽章:**アンダンティーノ・センプリチェ。フルートで出される主題を軸にした牧歌風の緩やかな部分に、スケルツォ風の急速な部分が挟まれる。

**第3楽章:**アレグロ・コン・フォーコ。ウクライナ民謡に基づく活発な第1主題と流麗な第2主題が対比されながら烈しく進む。

### ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op.33

チェロの協奏作品の中でも最上位クラスの人気曲。1876年12月～1877年1月、モスクワ音楽院の教授、すなわちチャイコフスキーの同僚だったドイツ出身のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために作曲され、1877年11月に初演された。「ロココ」とは、フランスの宮廷から始まったバロックに続く美術様式で、ここでは宮廷的で優美な趣を意味している。

だがこの曲、初演前にフィッツェンハーゲンが独奏パートを変更した上、無断で第8変奏をカットし、変奏の順番も大幅に入れ替えた。しかもそのまま出版され、なぜかチャイコフスキーも復元しなかったため、改変版によって普及していった。なお原典版も20世紀半ばに復元され、現在のチャイコフスキー国際コンクールでは、そちらの使用が規定されている、ただ本日は一般に馴染み深いフィッツェンハーゲン版で演奏される。

曲は、主題と7つの変奏が多彩な楽想とともに展開される、繊細で抒情的な音楽。短い序奏の後、チェロが優美な主題 (モデラート・センプリチェ) を呈示。第1、第2変奏では主題が細かく刻まれ、第3変奏では美しい歌がたつぷりと奏される。民族的な第4変奏、フルートの旋律をチェロが装飾する第5変奏からカデンツァを経て、哀愁漂うニ短調の第6変奏へ。そして快活な第7変奏とコーダで華麗に締めくくられる。

### ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.35

チャイコフスキーが残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と共に当ジャンルの代表作となっている。

本作もピアノ協奏曲同様の運命を辿った。1878年春、前年の結婚破綻による神経衰弱をスイスのレマン湖畔のクラランで癒していたチャイコフスキーは、若手ヴァイオリニスト、コテックに紹介されたラロの「スペイン交響曲」(内容は華麗なヴァイオリン協奏曲) に刺激を受けて構想が湧き上がり、僅か1ヶ月ほどで本作を完成。ロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまう。しかしロシアのドイツ系奏者アドルフ・ブロズキーの尽力により、3年後の1881年12月にウィーンでの初演が実現。当地の大批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されたものの、ブロズキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、遂にはアウアーも進んで演奏するようになった。

曲は、情熱と哀愁に充ちた聴き応え満点の音楽。協奏曲としては民族的な情緒が際立ち、チャイコフスキーならではの旋律美も魅力をなしている。重音その他ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

**第1楽章:**アレグロ・モデラート — モデラート・アッサイ。のびやかでスケールの大きな第1主題と抒情的な第2主題を軸に、華やかさと哀感が交錯しながら進行。技巧的なソロが縦横に展開される。

**第2楽章:**カンツォネッタ、アンダンテ。愁いを湛えたト短調の緩徐楽章。弱音器を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わる。切れ目なく次楽章へ。

**第3楽章:**フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ。ロシアの舞曲トレパーク風の歯切れ良い第1主題と、やはり民族舞曲風の第2主題を軸に進行し、熱狂的な展開を遂げる。